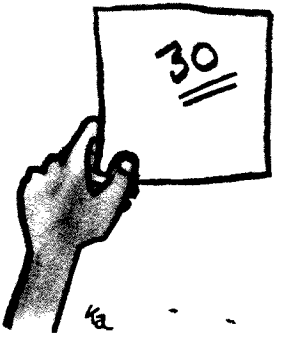
随筆集　**三十点の女房**　佐藤愛子



講談社

三十点の女房

昭和四十五年五月二十四日　第一刷発行

著者＝佐藤愛子

発行者＝野間省一

発行所＝株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二

電話＝東京（九四二）一一一一（大代表）

振替＝東京三九三〇

印刷所＝信毎書籍印刷株式会社

製本所＝株式会社鈴木製本所

定価＝五四〇円　落丁本、乱丁本はおとりかえします。

© 佐藤愛子　昭和四十五年　Printed in Japan

0095-124054-2253　(0)

目次

I

体験的悪妻のすすめ……11
クサンチッペ党宣言……20
三十点の女房……32
悪妻の弁……34
夫婦げんかのすすめ……36
再婚自由化時代……40
私の新婚旅行……50
夫をダメにする妻のタイプ……52
一日未亡人の記……60
直木賞がくれたラブレター……66

Ⅱ

魅力的な生き方……81
愛にひそむ残酷さ……88
愛の不毛……94
妻の優しさを放棄する……99
映画「輪舞」に描かれた愛……105
結婚・その城の幻影がくずれる時……114
男性のエゴイズム……120
素朴な愛情を……128
子供……131
昔と今……135

Ⅲ

最初の友だち……141

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

ガキ大将の弁……143
ポプラの小径……145
我が敢闘精神……149
トア・ロードの想い出……153
神戸の明治情緒を求めて……156
やけあとの青春……161
「失われし時を求めて」……165
前途遼遠……168
今はウルフのとりこ……172

Ⅳ

このニセモノ時代の新顔……179
転向者の弁……187
たとえ悪妻と呼ばれても……190
女のたたかい……193

女の顔が語るもの……195
美しい女の顔……198
本当の美しさ……200
化粧は生活のアクセント……202
化粧……204
現代紳士の条件……206
へんな言葉「夫と妻の話しあい」……209
女房のやきもち……212
ゴキブリ亭主……214
シームレス……221
夫の無抵抗主義を排す……223
完璧主義のオトシ穴……227
ささやかな進歩？……229
ネコがネズミを追うとき……231

V

生くるにも心せき……237
ヤジ馬バンザイ……240
お犬さま……241
セールスマンと説得……243
ガンコばあさん歓迎……247
ヤボテンよいでよ……249
残酷な話……253
敗戦は遠くなりにけり……256
旅役者村に来た……257
テレビとピーナツ……260
無苦痛時代を恐れる……263
現代を生きる……264
お医者さんのヒゲ……267

肥し湯……269
旅のおもむき……271
嬉野の旅情……274

Ⅵ

身ビイキの愛情……279
三代目……286
父のこと……288
父の涙……290
明治の名残り……292
女優の夢を捨てた母……303
へんなおふくろ……312
兄サトウハチローと私……314
へんな話……321

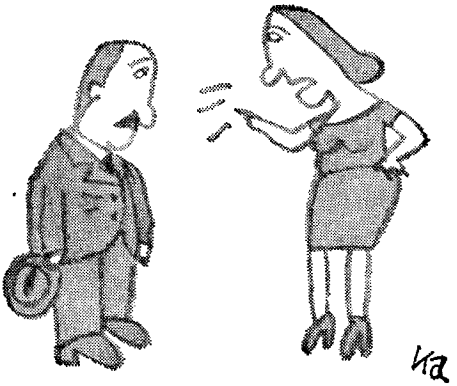
随筆集

三十点の女房

裝幀　風間　完

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

I



体験的悪妻のすすめ

〈ソクラテスの妻〉という小説を書いて以来、どうやら私は、にわかに悪妻の代表選手のようなものにされてしまったようです。

これにはまったく驚きました。私程度の女が悪妻の代表選手になるほど、わが国には良妻が多いのでしょうか？　私がそんなことを考えていますと、一人の友人がやってきて、私の疑問を聞いてからからと笑いました。彼がいうには、わが国には決して悪妻が少ないわけではないのだが、おそらく多くの妻は、悪妻といわれることを恥と考えていて、それを隠そうとしているのだ、というのでした。あるいは、そんな風にいうことによって、それを恥と思わぬ私が、正真正銘の悪妻であることを力説しようとしたのかもしれません。

なるほど、そういわれてみれば、そういうことになるかもしれません。私は自分で自分を一向に悪妻とは思っていないのですけれど、そういわれてみると、やはり代表的存在ということになるのかな？　と思いました。そこで私は夫に訊ねました。

「わたし、悪妻かしら?」
すると夫はたちどころに否定して、
「いやいや、決してぼくはそんなことを思ってはいないよ」
私は早速、その返事をさっきの友人に伝えました。すると彼は再びからからと笑ってこう答えたのでした。
「彼が否定したこと、否定せずにはいられないその心の襞の内側の悲痛なる心根、それがあなたにはわからんのですかなあ……」
つまり彼は夫の否定によって、ますます強固に私が悪妻の代表選手であるという信念を持ったのでした。
さて、悪妻という言葉を聞くと、たいていの人はすぐに夫婦喧嘩という言葉を思い浮かべるようです。事実、私の家では今や夫婦喧嘩は一種の名物のようなものになっております。といってもその喧嘩はたいていの場合、私の方からしかける喧嘩で、夫の方はただ受けるだけです。受けるといっても、柳に風と受け流す方なのです。そこで私の怒りはますます高まります。一方が闘争心を湧き立たせているのに、一方がそしらぬ顔をしているなんて、夫婦道にもとるものではありませんか。私はなんとかして夫に刀の鯉口を切らせようと、躍起になって騒ぎ立てます。私の夫婦喧嘩の理想は、向う鉢巻、たすきがけで、互に死力を尽して斬り結ぶ果し合いが理想なのです。私はなにごともあいまいのままにすましてしまうことのできない性分なので、腹が立ったらその場で心ゆくまで怒りきってしまわないと、なにごとも手につかなくなってしまうので

す。

そもそも、私たちの最初の夫婦喧嘩は、私たちの新婚旅行のときにはじまりました。私たちは尾道の駅で、夫が赤帽にチップを〈百円も〉やったということで喧嘩をしたのでした。

今では尾道駅はどんな風になっているか知りませんが、その頃（八年ほど前）はプラットフォームも短かく、そんなに大きな駅ではありませんでした。私たちは九州からの帰りに尾道で下りて、そこから瀬戸内海を船で福山へ出ようという計画でした。

晩春の午後でしたが、駅はガランとして人気なく、わずかに数人の乗客が下車しただけでしたが、その中の一人の老人が、そこにいた中年の赤帽にトランクを一つ預けていました。私たちの荷物はといえば、夫が中型のスーツケースを一つ、私が小型のを一つ持ったきりの手軽なものでしたから、もちろん、赤帽に頼む必要などなかったのです。

ところがプラットフォームから階段を下りて改札口の方へ行く途中で、老人のトランクを持ったその中年の赤帽が、ふと夫に声をかけたのでした。どうせ片方の手が空いているから、持ってあげましょう、というのです。持つも持たないも、もう改札口がそこに見えてるじゃないの、と私は急いでいいましたが、そのときはもう、夫のスーツケースは赤帽の手に渡っていました。赤帽は私の方を見て、奥さんもどうぞ、といいましたが、私は固辞しました。私はどちらかというとケチな方なので、自分に納得のいかない無駄使いは一文だっていやなのです。

私たちは改札口を出、すぐ目の前に見えている船着場へ行きました。夫は私に小声で、いくら渡せばいいと訊きます。たしかその頃、荷物は一つにつき二十円か三十円ぐらいだと思いました

が、そういおうとしたとき、私ははっと気がついたのです。赤帽はついでだからといったのだ。すると赤帽はサービスのつもりであって、お金をもらうつもりではないのかもしれない。だとすると、ここで下手に金額をいうと、夫のことだからその倍は出すにちがいない、と。

私は夫に向って、

「赤帽に訊いてごらんなさいよ」

といいました。訊けば赤帽は、

「いりません、サービスですから」

と答えるだろうと思ったからです。ところが赤帽はこう答えるではありませんか。

「いくらでも、お心持ちで結構です」

そこで夫の渡した金額が百円だった、というわけです。

その瞬間、私は思わず頭がクラクラッとしました。元来がケチの上に、財布の中が乏しくなっているからです。私には夫のしたことは、許しがたい虚栄心に思われました。お人好し、得手勝手、無計画——そんな言葉が頭の中になだれ込んできました。尾道から福山までの晩春の瀬戸内海の夕景を、私は思い出すことができません。それほど私は百円玉のために怒りつづけていたのです。

それ以来、星移り年かわり、私たちは相も変らず喧嘩をしつづけてきました。あるときは夫が株で損をしたことであり、あるときは花の咲かないバラを買ってきたことであり、あるときは目玉のとび出るほど高い（もっとも私の目玉は、こと値段に関しては、はなはだ飛び出易い目玉な

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co